

教育研究

《 研究主題 》

今、そして社会へ。

児童生徒一人一人の「生きて働く学び」を目指して (1年次)

I 主題設定の趣旨

1 前年度教育研究の可能性から

本校では、平成27年度から平成29年度までの3年間、研究主題を「一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して」と設定し、児童生徒の内面を探り、授業づくりや指導・支援方法の効果的な在り方についての実践研究を行ってきた。研究を進めていくに当たり、児童生徒の自ら学ぼうとする姿を「より高い動機を持って活動に取り組もうとする姿」と定め、一人一人の学習の「動機」に着目しながら研究実践を進めてきた。研究を深めていく中で、児童生徒の多様な学習の動機を「動機チェックシート」を活用しながら把握し、動機を高めるために「わかる・できる・ふりかえる」視点に沿って授業づくりを行い、児童生徒自身が学びを実感できる手立ての有効性について検証することができた。一方、こうした研究実践を進める中で、児童生徒の高まった学習の動機はその後、実生活にどのように生かされ、力となっていくのか検証していく必要性を実感した。近年の移り変わる社会情勢やICTの進化、SNSの普及など児童生徒を取り巻く環境は日に日に変わってきている。そこで、児童生徒が主体的に生活していくためには、学校で学んだことを児童生徒それぞれの社会の中でどのように活用していけるのかを研究として取り組むことは、児童生徒の可能性を広げ、学校教育として意義のあるものと考えている。

2 本校の教育目標から

本校の教育目標は、1977年に福島大学教育学部附属養護学校として開校した際に、初代の尾野成治校長と長谷場久副校長が設定したものである。学部目標は、教育目標を受けて各学部の児童生徒に分かりやすい内容で示してある。この教育目標は、教育活動を通して目指す児童生徒の姿でもあり、小学部→中学部→高等部と成長していく姿を現し、時代を貫く不易のものとして本校では大切にしていきたいと考えている。¹⁾

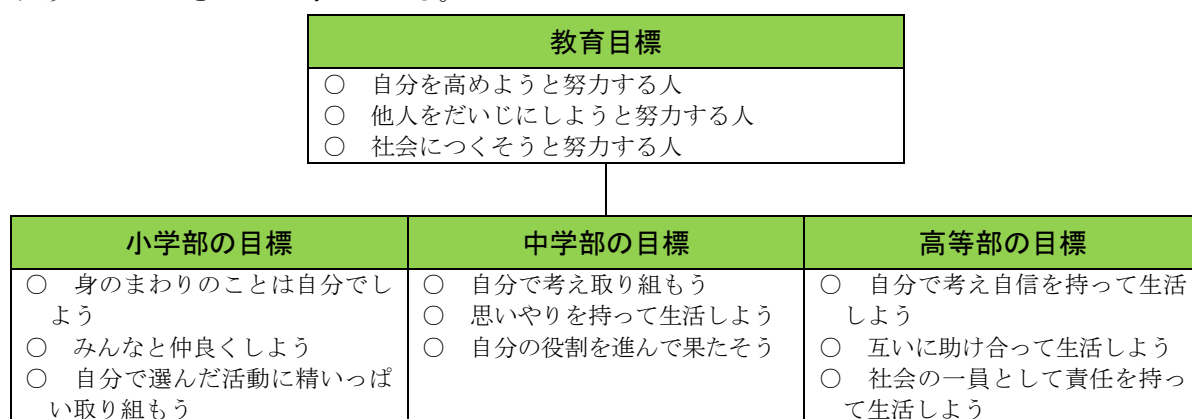


図1 福島大学附属特別支援学校教育目標及び各学部の目標

3 学習指導要領の改訂から

平成29年4月に新学習指導要領が文部科学省告示として公示され、本校においても新学習指導要領への移行を進めているところである。昨年度より本校の校務組織の一つに教育課程研究部を組織し、平成28年度から「キャリア教育を基軸として、小・中・高等部の接続を図った教育課程への改善」というテーマを設け、社会に開かれた教育課程の実現に向けて研究を進めている。

今回の学習指導要領の改訂に伴い、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」では、「育成を目指す資質・能力」について、以下のように示された。「①何を理解しているか、何ができるか（生きて働く『知識・技能』の習得）（中略）②理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）（中略）③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」これらは、新学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の三つの柱とされている。そして、新学習指導要領では、児童生徒が学ぶ過程の中で、新しい知識が、既に持っている知識や経験と結びつけられることにより、各教科等における学習内容の本質的な理解に関わる主要な概念として習得され、そうした概念がさらに、社会生活において活用されるものとなることが重要である。²⁾と述べられている。

4 研究を通して育てたい児童生徒の力

本主題を設定するに当たり、校内で「研究を通して育てたい児童生徒の力」についての協議を行った。協議では、児童生徒が学校で学んだことを自分の力にし、様々な場面に生かすことができる力や本校の特色を生かし、人とかかわることのできる力、自分の良さや弱さを知り、自分自身と向き合い、自己を高めることのできる力など様々な意見や考えが議論された。それを基に、主題研究部では、研究を通して育てたい児童生徒の力を図2のようにまとめた。

本校の研究を通して育てたい力は、「人間関係を作る力」「学びを生かす力」「自分と向き合う力」の3つである。「人間関係を作る力」とは、他者とより良い人間関係を築き、維持していくことのできる力のことである。「学びを生かす力」とは、実生活などの様々な場面で自分の力を主体的に生かしながら活動することができる力のことである。「自分と向き合う力」とは、長所や短所、得意・不得意なことなど自分自身のことが分かる力のことである。この3つの力は互いに関連して

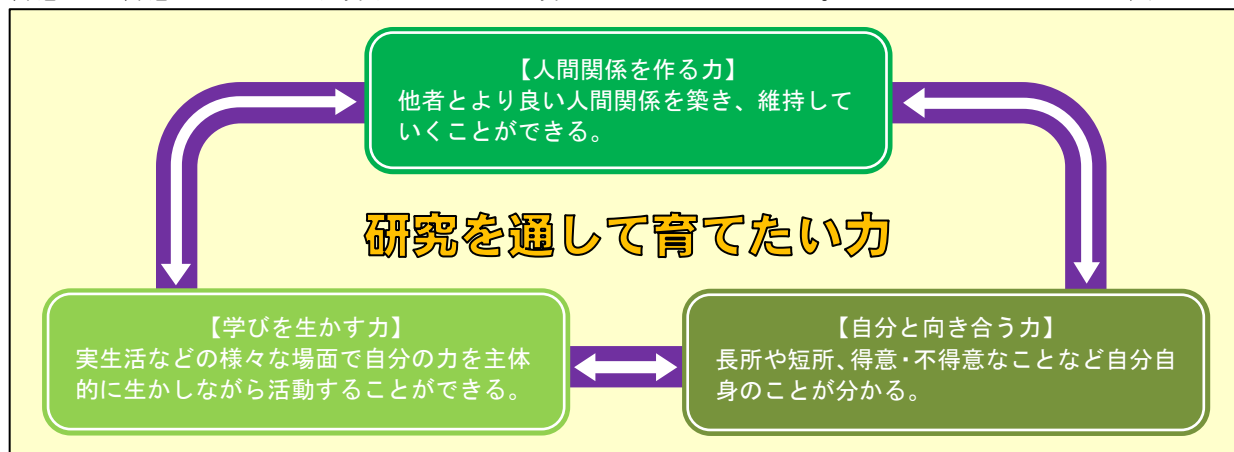


図2 研究を通して育てたい力

いると考えられ、例えば、「調理」を行う際は、友達と役割分担をして協力するためには人間関係の力が必要である。また、調理の献立を考える際は、自分の好みを知っている必要があるため、自分と向き合う力が必要である。さらに、これまで学習してきた調理の経験を生かしながら活動することで、より良い「調理」を行うことが可能となる。このように、この3つの力が相互に関連し合うことが、児童生徒のより良い活動を支えていると考えている。

また、本校が開校した時から大切にしてきた教育目標を今の時代を生きる児童生徒に身に付けさせたい力として再整理したのが前述した「研究を通して育てたい力」である。図3のように「教育目標」と「研究を通して育てたい力」は互いに関連しており、研究を通して育てたい力にアプローチしていくことは、本校の教育目標の充実にもつながると考える。

以上、本研究では、前年度教育研究の可能性、本校の教育目標、新学習指導要領、研究を通して育てたい児童生徒の姿から、「学びを生かす力」に焦点を当てて研究を行っていくこととした。

本研究を通して、児童生徒の現在と将来の社会生活の充実を図っていくために、「学びを生かす力」を培うことのできる「生きて働く学び」を目指して研究を行っていく。

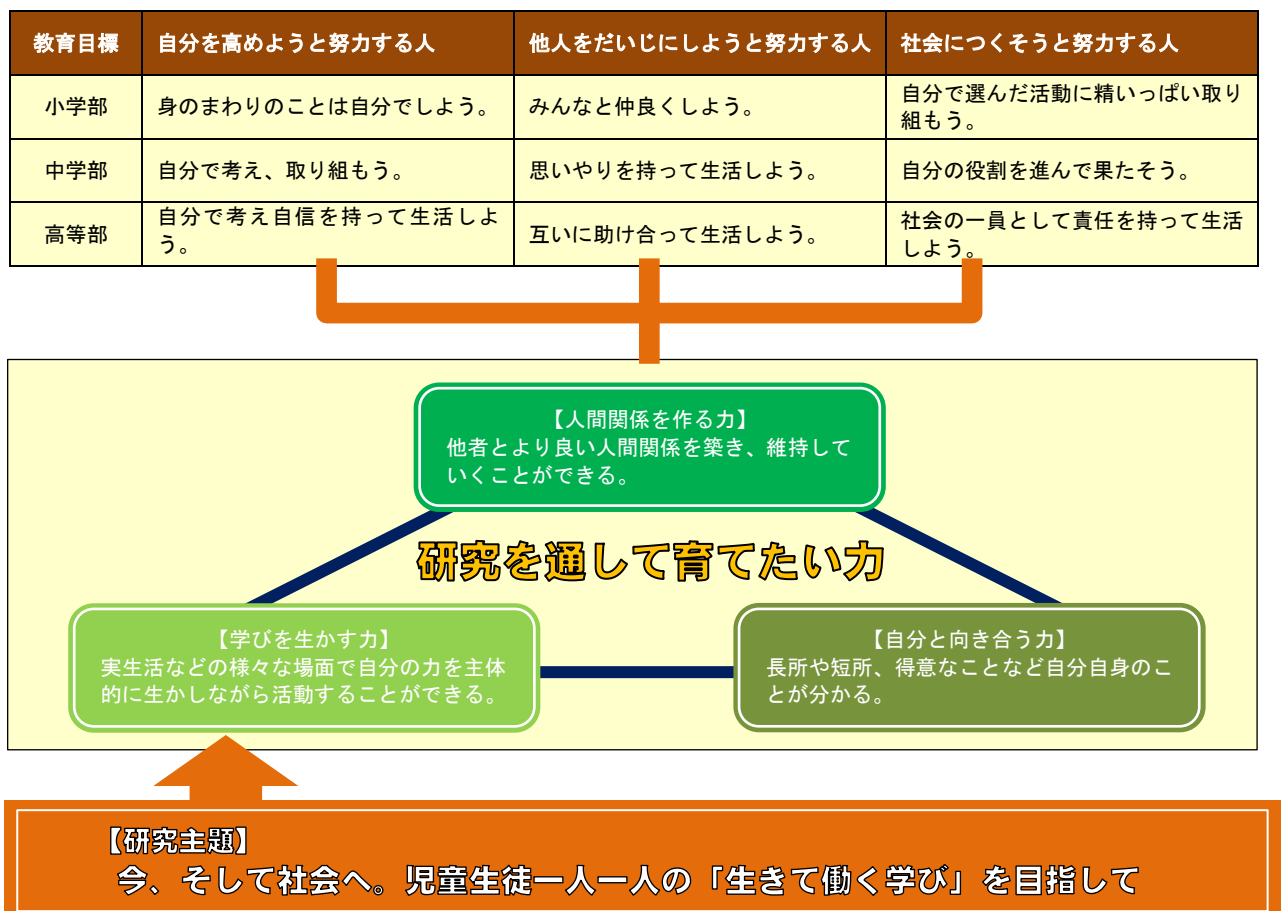


図3 教育目標と研究を通して育てたい力の関連性

II 研究の概要

1 研究の目的

児童生徒の現在と将来の社会生活の充実を図るために、児童生徒一人一人の「生きて働く学び」を目指す。

2 「生きて働く学び」とは

「生きて働く学び」とは、「知識・技能」「思考・判断・表現力」「主体的に物事にかかわろうとする態度」この3つの資質・能力が児童生徒の実生活と関連し合い、日常生活などの様々な場面で学んだことを他の場面でも最大限に発揮・活用することのできる学びのことであると本校では捉える。

3 研究の内容

内容1 「生きて働く学び」となる効果的な授業づくりの仕方や指導・支援方法を明らかにする。

内容2 小学部・中学部・高等部それぞれが接続した授業づくりの在り方を探る。

4 研究の方法

- (1) 教育研究学校公開、教育実践研修会及び事前研究会を通して学部ごとに研究授業を行う。1年次ごとに研究の仮説を設定し、仮説に沿って授業づくりを行うことにより、「生きて働く学び」となる有効な視点を検証する。
- (2) 小・中・高の接続を図れるように、各学部で関連する授業を見合う機会や視点を設定したり、事前研究会・事後研究会の場で対象授業の教科・領域等の他学部との関連性や学習の積み上げ方を明確にしたりする。

5 研究の計画

1年次	「生きて働く学び」を目指す授業づくり、指導・支援の探求 ① 「生きて働く学び」の共通理解。 ② 研究の仮説を協議する。 ③ 仮説に沿って学部ごとに授業づくりを行う。 ④ 研究授業を通して、学部ごとに検討した「生きて働く学び」となる授業づくりや指導・支援方法の有効性を検証し、評価・改善する。 ⑤ 単元終了後も児童生徒の変容の姿を事例として追い、「生きて働く学び」を検証する(成果・課題)。
2年次	「生きて働く学び」を目指す小・中・高の接続 ⑥ 1年目の実践成果・課題を基に仮説を変更し、実践する。 ⑦ 小・中・高の接続を図っていく。各学部で関連する授業を見合う機会や視点を設定したり、事前研究会・事後研究会の場で対象授業の教科・領域等の他学部との関連性や学習の積み上げ方を明確にしたりする。 ⑧ 1年間を通じた成果・課題を明らかにする。
3年次	「生きて働く学び」を目指す研究の定着・実践・発信 ⑨ 2年目の実践成果・課題を基に仮説を変更し、実践する。 ⑩ 小・中・高の接続や学部間の調整をさらに図り、研究授業を関連する教科・領域等で行い、実践していく。 ⑪ 研究してきたことを書籍化し、情報発信していけるようにする。 ⑫ これまでの研究の成果・課題を明らかにし、次期主題研究につなげる。

6 1年次の研究仮説

次の視点を踏まえて研究を行うことで「生きて働く学び」を実践・検証することができるだろう。

- (1) 「生きて働く学び」を目指した授業づくりと学習指導案の一体化
 - 学部ごとに「研究のSTEP」に沿って授業づくりを行う。
 - 対象の授業を通して目指す児童生徒の姿を明確にする。
 - 目指す姿にせまるように、単元の目標を①知識・技能、②思考・判断・表現、③主体的に物事にかかわろうとする態度の3観点で構成する。
 - 学部ごとに「生きて働く学び」につながる手立てを検討し、実践する。
- (2) 「生きて働く学び」を目指した研究協議及び評価・改善
 - 「授業評価ワークシート」を用いて、授業を参観する視点や事後研究会での協議の視点を明確にし、授業づくりや指導・支援方法、「生きて働く学び」につながる手立てを評価・改善する。
 - 研究対象授業の単元終了後も児童生徒の学びを生かす姿を事例として追い、蓄積・評価する。

引用文献

- 1) 福島大学・附属四校園KeCoFu推進協議会：福島大学・附属四校園 平成29年度KeCoFu推進協議会活動報告書～附属四校園が目指す「社会に開かれた教育課程」、p.16
- 2) 中央教育審議会：幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）、p.29、文部科学省

参考文献

- 1) 文部科学省（2017）：特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領
- 2) 文部科学省（2018）：特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）
- 3) 文部科学省（2018）：特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）
- 4) 文部科学省（2018）：特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）
- 5) 福島大学附属特別支援学校（2016）：一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して－研究紀要第38号）
- 6) 福島大学附属特別支援学校（2017）：一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して－研究紀要第39号）
- 7) 福島大学附属特別支援学校（2018）：一人一人が自ら学ぼうとする姿を目指して－研究紀要第40号）
- 8) 武富博文、松見和樹（2017）：『知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング』 東洋館出版社
- 9) 新潟大学教育学部附属特別支援学校（2013）：『特別支援教育 意欲を育む授業』－授業づくりの五つの視点－ ジアース教育新社
- 10) 鹿児島大学教育学部 肥後祥治／雲井未歎／片岡美華、鹿児島大学教育学部附属特別支援学校（2013）：『特別支援教育の学習指導案と授業研究』－子どもたちが学ぶ楽しさを味わえる授業づくり－

